

第 4 回障害者スポーツ振興ワーキンググループにおける主なご意見 (障害者スポーツセンターの在り方について)

<総論>

- いつでもどこでも誰もがの「誰もが」の主体が障害のある人である、ということを確認できた。障害のある人が置き去りになってはいけない、ということをごどこかに入れていかなければならない。
- 一般施設の共用化は設置者の理解が非常に重要。設置者の理解を深める取り組みをしていった方がいいと思う。
- ハード面のハードルを上げ過ぎずにソフト面がカバーできるところはしていきながら議論を進めていくことが必要だと思う。
- 第一歩は、当事者の声を聴くこと。本 WG では、その中で、一つの方向性や一定の基準を示していくという役割があると再認識。
- センターやセンター機能が増えていく、ということが大事。それが障害のある人の QOL を高めていく、ということかと思う。
- 利用者、スタッフ、支える人など様々な当事者の声を聴くことは大事。
- センターがどのように地域とつながっていくか、特に学校とのつながりは重要。
- リソースの共有と再分配をしていくという連携とともに、そこからアウトプットしていくための連携が重要ではないか。
- 障害者スポーツ協会や市町村のクラブの中に民間が介入して、縦割りを打破するような活動が大事。

<必要な人材>

- 今後のセンターの役割は、パラスポーツの地域への普及、また、それぞれの取組のレベルアップをしていくことであり、それらをマネジメントをする人材が必要。そのためには国からの支援も必要。
- 地域の中でマネジメントできる人材の育成が重要。コーディネートできる人材の育成の仕方について、議論する必要があるのではないか。
- スポーツ、福祉などで話し合いをするところから、連携ができてきたというような事例も聞く。関係する部署、障害者スポーツ推進という意味で横串を指していく、ということが必要になってくる。
- 指導者については、競技用具を障害のある人に合わせて、適切な助言をする、簡単なリペアをするようなスキルが必要ではないか。
- 初級指導員の資格を取得しても活動の場がないというのはよくある話。江戸川区のアンバサダーやコンシェルジュは、それを解決するいい事例だと思う。
- 福祉医療と連携について、理学療法士との連携はよく出てくるが、作業療法士も精神障害者のスポーツの連携で活躍が多い。

<機能の整備にあたり留意すべき事項>

- イニシャルコストは3割程度と言われるように、ランニングコストについてどうしていくかを考えていくことが重要。
- イニシャルコストへの補助制度が必要だと思うが、ランニングコストをすべて公費で賄い続けることは難しいので、ランニングコストについては受益者側の負担を検討する必要がある。一方で、受益者側も負担できなければならないので、クラブチームなどもマネジメントが必要。市場開拓としては、健常者を取り込んでいくことや病院や特別支援学校へのマーケティングも必要。
- 都市型、地域型で形が変わってくる。設置者の理解が大事で、自治体のスポーツ推進計画などに落とし込んで、予算取りをして推進していただければ。
- 市区町村レベルで指定管理者制度をどのように変えてもらうか、それをどのように進めていくかが重要。